

## 大学祝典序曲とドイツの学生文化

10年以上前のことだが、ドイツのベルリンで夜地下鉄に乗っていたら、数人の男子大学生がどやどやと乗り込んできた。驚いたのは、皆が片手にビール・ジョッキを持っていたことだ。ジョッキにはビールが入っていて、車内で飲む者もいる。そして、二つめぐらいの駅で再び騒がしく降りていった。要するに、飲み会から別の飲み会へのはしごの途中に地下鉄を使ったわけで、飲み会の雰囲気がそのまま車内に持ち込まれた。周りの乗客には驚いた様子がなかったので、珍しいことではないらしい。

こんな芸当が出来るのは、ドイツの鉄道駅には改札口がなく、改札係の駅員もいないからだ。お客は、券売機で切符を買って乗ることになっているが、改札口がないので無賃乗車も可能だ。そのかわり、車内での切符の検札が時々あって、もしそのときに切符を持っていなければ、高額な罰金を払わなければならない。

ベルリンの地下鉄では、こんな経験もした。その時は向かいの席に女子大生らしい四人組が座って談笑していた。突然彼女たちの会話がドイツ語から英語に変わった。彼女たちの目線の先を見ると、車内の向こうの方から、いかにも車掌という格好をした年配の婦人が近づいてくる。推察するに、彼女たちは無賃乗車で、アメリカかどこからか来た観光客を装って、ドイツの乗車ルールに不案内だったことにして罰金を逃れようという作戦だったのかもしれない。残念ながら、私は次の駅で降りなければならなかったもので、結末を見ていない。

ドイツの大学生のこうした素行は、伝統から来ているようだ。かつて名古屋大学にいらっしゃった潮木守一先生の著書『ドイツの大学』を読むと、十九世紀後半のドイツの大学生たちの多くは、酒と決闘（といっても生命にかかわるわけではない）という学生文化に浸りきっていた。吐くまで飲むこと、決闘で顔に切り傷をつくること、夜騒ぎ回って警察を嘲ることが「男らしい」「学生らしい」「ドイツ的」とされた。たとえ警察沙汰になったとしても、処罰を行うのは普通の裁判所ではなく、大学の裁判所であり、悪事をはたらいた学生は大学の「学生牢」に入れられた。ハイデルベルク大学には、今でも当時の学生牢が保存され公開されている。昨年訪れてみると、案内板には日本語の説明もあって、次のように書いてあった。

十九世紀から第一次世界大戦の勃発で学生牢が閉鎖になるまでの間に学生にとって拘留は一つの楽しみとなった。それどころか、学生時代に一度も拘留されないことは恥ずべきことだ、という風潮まで出てきた。「夜中に通りで大声で歌い、近所の人に迷惑をかける」「酔っ払って公衆の秩序を乱す」「学生同士で決闘する」などが学生の代表的な不法行為だった。学生が特に楽し

んで働いた悪事は、旧市街の住民の豚小屋を夜中にこっそり開け、逃げ惑う豚を町中追い回すというものだった。

ブラームスが「大学祝典序曲」を作曲した 1880 年は、まさにこの時代である。彼が名誉博士号を授与され、その返礼にこの曲の初演を行ったブレスラウ大学は、現在はポーランドのヴロツワフ大学となっているが、当時はビスマルクのドイツ帝国領の大学であった。馬鹿騒ぎをした学生が入る学生牢もあったはずだ。

ブラームスは、大学生たちが夜中に大声で歌い、近所の人に迷惑をかけていたであろう学生歌を「大学祝典序曲」の中に挿入した。ブラームスが使った四つの学生歌のうち最も有名で、今でもドイツの大学で歌われるのは、序曲の最後に登場する *Gaudeamus igitur* である。この学生歌の歌詞は「若いうちに大いに楽しもう」で始まるのだから、学生たちの気分を高揚させるにはもってこいの歌である。

それにしても、ブラームスの時代は、ドイツが音楽だけでなく、科学においても世界の頂点にかけのぼっていった時代であった。ドイツは明治期の日本人エリート  
の主要な留学先であったし、二十世紀初頭になるとノーベル賞受賞者を輩出した。大学生が酒と決闘にあけくれていたのにもかかわらず、なぜ科学大国になり得たのか。上記の『ドイツの大学』から読み取れるのは、学生のエネルギーである。1848 年革命前後、ドイツでは大学紛争が頻発し、学生のエネルギーは政治闘争、一部は武力闘争に注ぎ込まれた。しかし、紛争が一段落すると、革命の挫折感もあいまって、学生たちのエネルギーは、酒や決闘の乱痴気騒ぎに向かった。とはいえ、学生の誰もがそうであるはずはなく、中には、そうしたことに背を向け、自らのエネルギーを科学的な真理の探究に集中する者もいた。あるいは、一時的に馬鹿騒ぎに浸っても、しばらくするとそれに飽きて、学問の道に進んだ人もいたであろう。酒と決闘の学生文化が旺盛であったからこそ、その対抗軸としての学問の発展があったのかもしれない。いずれにせよ、社会と若者にエネルギーが充ちていたのは間違いない。その熱い雰囲気やブルームスの「大学祝典序曲」は、後世の私たちに感じさせてくれる。

( [名古屋大学交響楽団第 106 回定期演奏会パンフレット](#) )